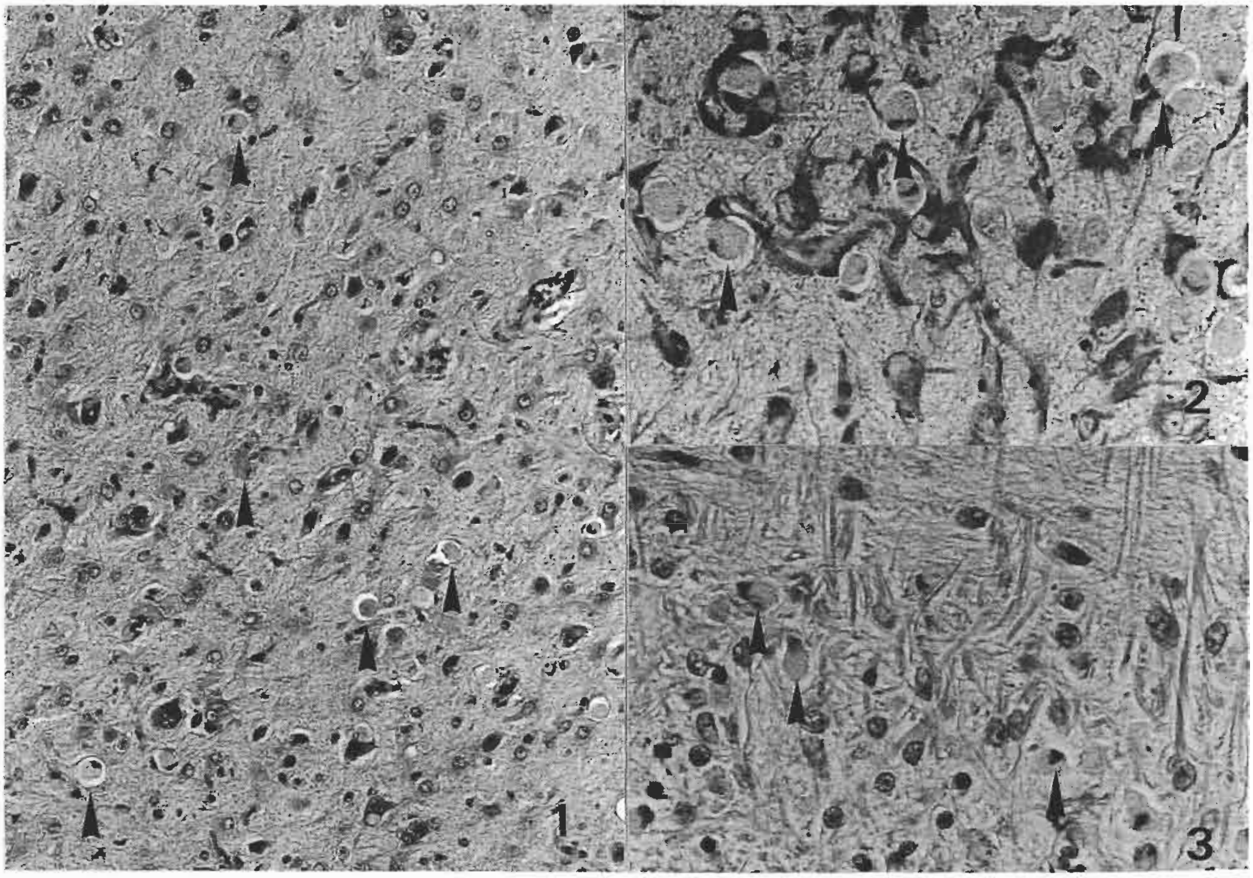
猫の脳

東京大学農学部家畜病理学教室出題　第32回獣医病理学研修会標本No.580



動物：日本猫，去勢雄，１歳。

臨床：1990年４月頃より振顫，歩行困難，測尺異常が認められ，次第に重篤になった。６月に本学家畜病院に上診。ＣＴ検査の結果，脳室の拡張及び小脳部にＸ線透過度の異なる部分を認めた。その他全身状態に異常はなかった。プレドニゾロン，グリセオール，アセタゾラミドの投与を行ったが，症状は改善せず，８月16日安楽殺。家族歴等は不明。

剖検所見：大脳，小脳ともに萎縮し，脳溝が顕著であった。表面は褐色調，割面では皮質の萎縮，側脳室及び第４脳室の中程度の拡張がみられた。頭蓋骨は肥厚し，骨性小脳テントは発達，大脳横裂内に深く入り込んでいた。肝は褐色で，表面及び割面に径１mm以下の黄白色点を多数認めた。その他臓器に著変はなかった。

組織所見：大脳皮質は全体に萎縮し，抗ＧＦＡＰ抗体で染色されるアストログリアが著明に増生していた（写真１，ＨＥ；写真２，抗ＧＦＡＰ染色）。さらに，淡黄色不定型物質を取り込むミクログリアが多数見られた（写真１，２矢頭）。同物質は神経細胞内にも沈着していた。この物質はＰＡＳ染色で赤紫色，ナイルブルー染色で深青色，ズダン黒染色で黒色，抗酸染色で淡赤色，ＬＦＢ染色で青色を示し，黄緑色の自己蛍光を有していた。電顕的には高電子密度の不整形小塊として観察された。以上より，この物質はセロイドリポフスチン（ＣＬ）であると考えられた。小脳では皮質が萎縮，プルキンエ細胞，顆粒細胞の著しい減数が認められ，ＣＬを含むミクログリアが多数見られた(写真３，ＨＥ)。ＣＬは脳以外にも，肝の類洞壁細胞（kupffer細胞）内，リンパ節や脾臓のマクロファージ内にも蓄積していた。

考察：猫におけるセロイドリポフスチノーシスは報告が少なく，とくに全身性のものは報告がない。この症例は非常に稀有な例と思われた。

診断：日本猫におけるセロイドリポフスチノーシスの脳病変。